

# 美術館

永瀬 公恵

チューリッヒの雨で濡れた石畳をロマンチックな街灯のたつ川沿いに市立美術館へと急ぐ私達。この自由行動の時を逃しては、日程にない美術館へは足を運べないだろうから、自然と私と友達の足は、速くなる。入口で、特別展と常設展に分れていたの、当然のことのように無料の常設展の方へ入る。入口には荷物預り、喫茶室と施設の良さに感激する。展示室の中に入ってまた感激、日本と違い各展示室ごとに係員（警備員）がいないのである。何と私と友達と二人だけ、こんな静かな美術館鑑賞は、ひさしぶりである。いつもの人でいっぱい、移動する時は「すみません」の一言が必要な美術館と格段の差がある。今でも三年前のモノのパステル色の絵が、頭の中いっばいに浮ぶのである。

次に印象に残っているのが、熱海のMOA美術館である。二日間の私立大学通信教育協会研修会が熱海であり、仕事の他に何か楽し

みをと温泉以外に捜しているとMOA美術館が美術誌に載っており、これは、見ておかないと後悔すると思ひ、出張前夜は研修会の下調べはほどほどにし、美術館の場所と展示品を頭の中にたたみこみ、研修会へ一緒に参加するM氏に、京都で新幹線に乗るやMOA美術館に行くことを頼んだ次第である。研修会が終ると他大学の方々への挨拶もそこそこにタクシーを飛ばして山の中腹にある美術館に入る。入口からエスカレーターに乗るが何基乗り継いだかわからないほど長いエスカレーターでやっと展示室に到着、帰りの新幹線の時間がせまっております、鑑賞したのは、美術品よりも、エスカレーターと壁の方が長かったのではないだろうか。大学に帰ってから、M氏とは、研修の内容よりも美術館の感激の方が話題となったものである。

高校三年生の時、兵庫県立近代美術館で「ルノワール展」で胸をときめかせて以来、私の美術館熱は続いている。佛教大学へ入学してからは、授業の合間に、マチス、ホドラー、ルノワール、セザンヌ展等々、美術館・博物館を公立・私立を問わず訪ねたのである。また、金沢弘先生の「博物館学」の授業を受けてからは、ますます楽しくなり、美術品

のみならずその建物を見るのもおもしろくなる。京都からは、近鉄をつかうと奈良の美術館・博物館も近く、美術鑑賞の後には、二月堂までいき、奈良市内をのんびり眺めるのが、コースとなった。この美術館行きも、職員として勤めるようになってからは、混んでいる日曜日しか無理となり、絵までの視界の中に人の頭がはいったり、話ながら見る人がいるので自分の感覚でゆっくりと見ることはなかなかできない。しかし、私の休日は、美術館と茶会で埋まっている。これも、京都という土地柄のおかげだと喜んでゐる。就職試験の折も、受験理由にこの二つを述べ、面接された先生方に、きつく理由にならないと言われたが、就職して八年目となるが、やはり京都は住みどころがよい。

人生の伴侶のいるところならば地球上どこへでも住まいを移せると思っている私ですが、当分、京都から佛教大学からも離れず、美術館へ足を運んでいることでしょう。

（ながせ きみえ 四条センター課員）